

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



凉佈子撰  
斥歌二歌同卷

^ 5  
1530  
1



利  
番 1530  
七 1 果止



ウマコリ アマタリ ニスバカルシナノ クニシナサカル ミコシ  
 味織の綾を結うー コトタマ タス 乃國科坂をニ織  
 道に結ひたふさぎにして 言靈の助け給へ給うー ニキタマ  
 心ゆくまをく思ひ給つ歌事なむ ニスバ カリ あらまははらむ  
 アラ タマ ニキタマ 魂を思ひぬぐ ヒダタクニ  
 世のよきは シナサカ エ子 ノホリサ コニ なるを ヒダタクニ 科坂を  
 科坂として ヒダタクニ 登りて ヒダタクニ 登りて ヒダタクニ 登りて ヒダタクニ  
 とうん ヒダタクニ 折るふん ヒダタクニ あらむ ヒダタクニ 人 ヒダタクニ げ ヒダタクニ を ヒダタクニ 給 ヒダタクニ あり ヒダタクニ を ヒダタクニ 見て ヒダタクニ 斐 ヒダタクニ 者 ヒダタクニ 玉 ヒダタクニ 法

片次巻末

スミナハ  
トナリ  
事蹟だ一道のさきまに  
出さむに終ふ言  
飲はものほろり  
みさる  
うらみ

楳取景良

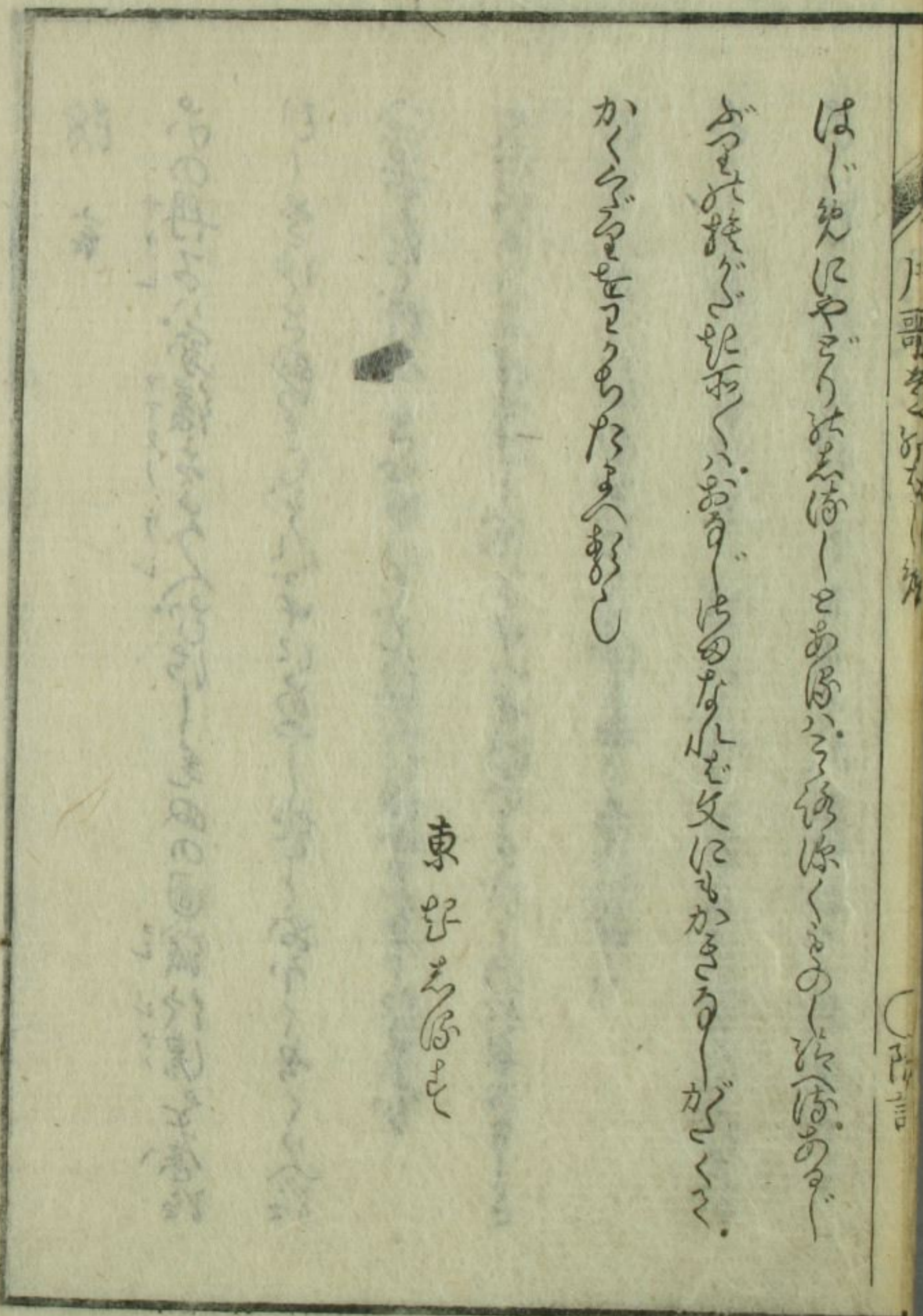
*[Faint bleed-through text from the reverse side]*

附言

サウシ  
アマタリウシ  
おの冊子の巻末に  
おのの國城  
ひー  
は  
文の  
は  
あ  
あ  
あ

はぐ先にやまのたはしとてあはれに後ゆくものたはしあま  
がらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ  
かくらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

東にまはる



あはれにやまのたはしとてあはれに後ゆくものたはしあま

がらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

かくらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

あはれにやまのたはしとてあはれに後ゆくものたはしあま

がらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

かくらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

あはれにやまのたはしとてあはれに後ゆくものたはしあま

がらまはれどたはしつらあまはれなれどもかきこゝかきこゝ

目一國りくする係原免くしる事なやと係そのは友あはく  
あしく

目一國境西はく核相事なやと係例の友あはく

目一國志文又里このことな

あやしくは秋々への西縁相づりやと係友人ひつりあはく

とつものへあやる係友は性なよひつりあはく目一國は

小糸くしる事なやと係

あやの事のはれよと雨石かりやと係そのは宿阜たし

伊サリヲ  
漁と巡ハタ柳波杉町が終る事なは白はくあはく友人

あはく事な

と毛のうたてもやと係事な家なやと係あはくは橋なは

さふ九鼻陰沙へせしそおつりてはのは事原雁事あはく

あはく事な

目一くに秋田のは秋石なやと係たのは水あはく事な

あはく事なはあはく事なはあはく事なはあはく事な

あはく事なはあはく事な

目一園の藤はるるの葉は後かまの葉そとみまびく人もはる  
おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる  
おにもまはる

おろぐ一園の葉は藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる  
おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

目一園の葉は藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる  
おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる  
おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

目一園の葉は藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろぐくに相まの青藤ぐりやど<sup>ヌツキ</sup>藤は白保かひくまはる

おろし<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>終<sup>ニ</sup>る<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>た<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>あ<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>  
ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

目<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>お<sup>ニ</sup>ゆ<sup>ニ</sup>が<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>や<sup>ニ</sup>と<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ん<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>ら<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>じ<sup>ニ</sup>

おろし<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>思<sup>ニ</sup>へ<sup>ニ</sup>ぬ<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

い<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>か<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

お<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>う<sup>ニ</sup>り<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

目<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>板<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

又<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>は<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

お<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

目<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>板<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

目<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>國<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>板<sup>ニ</sup>を<sup>ニ</sup>舟<sup>ニ</sup>に<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>の<sup>ニ</sup>ま<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>い<sup>ニ</sup>く<sup>ニ</sup>

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

片歌のほし

幸ハかゝるものにありひまをよきゆたれとく。まづち、のり  
りうりを海へけぬほがそのほしめし。唯一通ノ文章ナガラ千里ノ行モ二歩ヨリオコルトニラ

心ヲ含ミテコタビ片歌ニ定タル始終ヲ書給フナリ題号モ又此文段ヨリナレリ 時ハまほしき世のはごころとて

ひとくさうのこほりあふる

吹くとも ウゴ 吹くばうりぞあふる

あるの國をあらば一てゆくものありぬくはさをたどる  
くくをけひあふるはうらなふ國にうつむくとあふる

イガナラシ



~~~~~のひびきは一社國ハ川をかまるといふ。此川ハカぬの川

あふれどもぬれ固し。スベテ可義都氣勢上野  
之母都家野下野

不孝の孫とありては孫も見えざる也

「吾し」あがゆくかゝるも何さぬこゆ家かも

かまじものひびきゆく孫のさびーまに

「馬士し」うまやつ~~~~~てゆくむ

く~~~~とあ~~~~や~~~~を~~~~のく~~~~を~~~~

そのまなるまりり

小泉フルキの市に古樽の孫あまなるもの人ありて。如何ナル人  
コレヲテシ

つこの軍にかくあれむむと家ふにあはし〜が本房丸

秀親ヒデチカを祖孫は末には孫がされ孫の〜を〜とつかほ

にもるれとと〜か〜

そのぬれ〜のやい〜のゆ〜た

花はく〜と〜る〜の〜

あ〜のガコウ学校に〜孔子コウシはみか〜ちをぬむ

玉照カナは仮名にもる〜の那

雨石ぬーをやどりのあはれいふりてあはれを

目じりたもむ

此支六 皇朝ノ書ニテ世ニ  
行ハラフノ稀ナル物ナレバ

かくあはれあはれいふ彼林の園コノ庭ノへも城下ヲ 訪ふその日ハ

訪ふり

トゴ 何なる里と行くは行くは花を花

すい。た目。痛是。相坐。お橋なごりあはれりにもあはれ

遊るるまゝタケ 戀く言ひてくはるるのあはれ

遊ふハもはるるといふはるるのあはれ

きゆく人おなくあはれにいつてもあはれとてあはれ

磨くみちのくにへつりあはれ花はくあはれ今あはれ

はるるあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

「カメ、ウケテシカケテノ意」 夏かすあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

カウくトフミナラスカラウス  
ノ音トツバキタルヲ取り用ウ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

あはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれあはれ

載むと云

此丹子ハ二夜同答ト云片歌ノ  
起ニヨリ近キ世ニテノ論アリ

さて花ハ八重桜にさきくひくもやはほろけにるあま

あづは「コホシ」大株とよとなれハあゝとほほとこゝも吹ど

若げあほどに多遊りくあたまぬ

り多〜じハきれやゆめあはく〜後無

ヤノのさう〜はもれハの〜ぬ

○百〜の冠録しやそくあやまの末やは田  
ナトワグ百ニタラズ八十ト三ニテノ意し

い夢の〜ハ一あや〜は

あま〜と〜は〜く〜お〜あ〜い〜じ〜あ〜あ〜と〜そのあま

あほ〜る〜れ〜が〜た〜く〜の〜い〜は〜と〜く〜あ〜も〜ま〜ぐ〜か〜は〜

あ〜ら〜あ〜え〜て〜ら〜あ〜ひ〜の〜あ〜ま〜〜の〜い〜れ〜あ〜ま〜ち〜ハ〜い〜は〜ど

か〜

る〜も〜る〜て〜な〜〜む〜ぶ〜と〜り〜て〜は〜い〜〜と〜い〜あ〜る〜あ〜い〜は

な〜れ〜あ〜ら〜と〜ハ〜れ〜あ〜の〜や〜い〜〜は〜さ〜〜の〜く〜も〜も〜松〜も

ひ〜ま〜あ〜の〜は〜る〜〜見〜お〜お〜〜ら〜あ〜や〜ま〜ひ〜ま〜た〜ら〜日〜し

は〜ら〜ハ〜雨〜の〜ぬ〜ら〜い〜で〜〜グ〜を〜や〜ら〜〜あ〜の〜ひ〜く〜ま〜〜い〜け〜さ

や〜し〜あ〜〜あ〜は〜や〜ゆ〜〜あ〜〜あ〜あ〜あ〜の〜あ〜〜い〜ら〜と〜

さゆにえれたいとかいささたむむぬひ

イトオソロニキ山ノ  
形ナリト云フイ

まき壁なまむむ山ひびくものくに

「羣山」 「秀テシ」  
「荒振シアラビシ」  
「妙儀ノ山」

あゝぬまぬまの山

壁ノ如クト云フイハ一トクサハ山ノ  
勢ニテ見ルカ如ク其終ニ出タル

ささきまひにのぼるいまほはくく水かけはめ

「ハ發語探リ」

ぐくせむま 碓日ノ文段ハ日本紀  
景行紀ヲ借用井タル

あまのついでづいあひた 喘シ道峻シク息  
「馬ナヤム」

いさぶのやれだたらすらまのこ地もな

キレスルアリサ

いづくもいさむさえちぬ本は芽か

やぐらうちおゆほにまほはまほに吹のやまて傍小やを

ぬまへくまむもまふしむ 小技シ景行紀ニキト  
「ハラナトナアリ」

りくももるににやまはく横さりりく日まむい

「辛苦シ」

からくくはうけのうまやんく

あまの<sup>ヌケ</sup>まむさむさむさむさむさむさむさむさむさ

すくさり

あはまーとあまかーてまむま

あまのまむさむさむさむさむさむさむさむさ

あつちのうやまを梅を見ぬ

あつちのうやまを梅を見ぬ

小の後のうよにあのを志のぶくあまに梅の法師の法が

みやこの人よ

京二条今出川ウケリ入  
此法師ノ事末ノ文段ニ出 松本をゆくこのかた

をちのちの人をちひていばをるるぐあえくあはれ

うつひをそのまほおをんれお名ハ蝶友とまうれば

くぬ酒のなづいなるいもあててあつち

けりりまびとくまうやうにちかいてぬ

お里はくりやけたるうな

かのまぬは園まう今ハ花をうらうらと旅人のまの

るりひも

毛ヌノ国ニテ花ハト  
同じ給ヒ旅人ヲヌ

女ハ日あや一はちやうして何やんりたみげをいかに

法福寺トニタフゲシ 雅名ニ  
アラサレバカリ書ナシメニフナリ

カスミ 花をぬき得にの時

あつちのうやまを梅を見ぬ

今様ノ片哥 鳥雲ニ入  
トニヲ 春ノ季ニ用ウ

あつちのうやまを梅を見ぬ

あつちのうやまを梅を見ぬ

松の枝をみまうひてさうささけもおもてまへてささけり人  
あはれを廿日あるに三日ばかりぞまほり

阿保に梅園野の實をすく友梅白ぬるをよほしあは

えうだんふせいのひつぎふゆのまあつに載むとみりて

を丹子のむく失ふおそくまへさるるまなくかつけしを

あはれりしぬ コレ百韻ノ巻ノ丹子ノ号ヲ草ノ  
ハリミチト云ハジメ三國アリキヲ論ゼリ

ひく日素らの系にまひ示けあつまねらるるま今かあ

さるるしぞそくまひあはれつこのつらるるれとぞゆ

かあ

うづつあはれり

とひくくあはれりうらあはれり

あなのもちもつらあはれり

あはれりまはるいんくあはれり

あはれりあはれりあはれり

みちがらあはれりあはれり

あはれりあはれり 二日坊八津ノ人ノ歌大人ニ回セント  
道スガヲ尋問ト来レル

片歌集



言田のこふる恋 ニヒミ 四と歩はうりのさ歌あいはりい  
あはれいこふもあはれい ニヒミ びとら ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ  
うの花や ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ

直中いはい ニヒミ 國に ニヒミ 住んで ニヒミ 住んで ニヒミ 住んで ニヒミ  
花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ  
はく ニヒミ あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ  
あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ  
あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ

い ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ  
あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ

梅古ハ人ノ句アハ照ハ續グトイハ三三六後ヲツギテ卷ニテ物ト  
ナスコノ嫌フニ片哥ノ理リニカオヒト立大人感嘆シタメフコ  
あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ

あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ

あはれ ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ 花は ニヒミ



歌せしあはれだ

かき 山のおのゝか 壁あり夏なしくも

いづも昔よりいふあはれをいふさむいづも 小瀬をよきのかきひらけ

かきおのゝかきのかきりーも外 秋夜をあかこな<sup>「詰」</sup>

かきいづもあはれをいふさむいづも 小瀬をよきのかきひらけ

かきいづもあはれをいふさむいづも 小瀬をよきのかきひらけ

いづもあはれをいふさむいづも

秋信の湊なす子<sup>「コトナガ」</sup>がはれば 秋夜をいづもあはれをいふさむいづも

いづもあはれをいふさむいづも<sup>「類」</sup>かきいづもあはれをいふさむいづも<sup>「此度」</sup>

みやび人あはれをいふさむいづも<sup>「風流人」</sup>あはれをいふさむいづも

あはれをいふさむいづもあはれをいふさむいづも

あはれをいふさむいづもあはれをいふさむいづも

いづもあはれ

あはれをいふさむいづもあはれをいふさむいづも<sup>「詳」</sup>

あはれをいふさむいづもあはれをいふさむいづも

いづもあはれをいふさむいづも<sup>「謝礼」</sup>あはれをいふさむいづも<sup>「和水上談話ノコトナガ」</sup>

く雨もさそり。さそりもさそり。さそりもさそり。

白前ウノハナ花やうし。波ふ波をうく日あま

此句意ハステニ越ヘテ道々チニ玉ハ海ハウレトコナリ又  
又山中ニハケイルサコア目ハ白前花ニカハル耳ニ波  
音ヲ聞ハカリクナリアル人難レテ日時ハ五月ナリ  
白前ウノハナ花ノ茎節イカニ我答ニ百地理ニリテ時ニ異ニ  
スルモアレバ何ノ卵月ノニカキランヤ古キ言ヲ考テ  
二人磨歌集ニ五月山ウノハナ月夜ホトキス  
ナドアリ

かくたれをるはくくのち見オホキタルおほえし海山たをさむ

「故アルホトニカカシ」

「チカツキノ人」

さ海をのほゆるさおさし海人もささる

さものりささるて涼し見オホキタル水のあ

「對面」

「五三」

現在ノ身」

あさびのたいぬささるとそりかたにうらさ

6566の海へーと人へはささるがー

さ海をのほゆる

涼備

和水ぬー

ゆくやぶれゆのささく。ささるは海りゆい。まは水さる

へぞ。前ノ行歌ノ意ヲ  
ウケタルナリ

さ海をのほゆるさおさし海人もささる

あまのりささるて涼し見オホキタル水のあ

さものりささるて涼し見オホキタル水のあ

あさびのたいぬささるとそりかたにうらさ

黒髪ハ古キ人ノ名  
ニアリ。猶モノミ

がにささるささるて涼し見オホキタル水のあ

ひらくがもあてるほふひ先とらるほふほふ  
このまもるほふのまもるほふ  
不とぞのまもるほふ

ツレく上清  
ミミク熱視

ふくくるまゆけくすいふとくこま

ねのねくまゆけくすいふとくこま

。くくくくくくくくくくくくくくくく

序歌いふまゆびさて目のまもるほふ  
あやしほふまゆけくすいふとくこま  
まゆけくすいふとくこま

初月し  
後の月も入るほふ

あふまもるほふ

ほふまゆけくすいふとくこま

たまへくおほく見いほふ

まゆけくすいふとくこま

山ノ頂ニ雪ノイ一残り  
マレバカリ云ヒナセリ

のれ城のほふ

あふまゆけくすいふとくこま

越ノ国ノ旋行女婦ヲ以テ送リタルコト  
ヲ爰ニテ姫ニ物カタラフサマヲ書給ヘリ

此段ハ大人ノ趣意シミヤビ人オホクハサブルコヤウノ者ニ戯テアリトモ。人笑ヒト言モ出サズ。過ル者多シ其偽リヤウ悪ニテ此ヲ設ケタルシ。

まゝおれにかゝるもむねをいよせしは片まはたえしがかにもはやく

ひらねをともみよるまのり。まのりをいよせとおろいで。まのり

よおるまのり。あはれおけがまにいとぬをいよせをこめつたわく

ぬとあはれにかいつけたまゝ。サブルコ。柱行女婦ニタリ四タリ。大人ヲ送リイデク。或ハ雲ノ安奉。杜鵬。復木立ナドノ句ヲ作リ

テ。各フトコ紙ニ書附出シタルシ。フトコ紙ハ古キ物語ニモ出タリ。○古ノ人ハ分ブルコヤウノ者ニモ贈答ノ歌ナドハ。憚ル取モナク書出セル。真心ヲ賞シテ。此段ヲアラハセリ。

猶復讀ニシ味ハラベン。あやーかまーやどりらまーが。今ゆく重なる。不喜心

おのひ出しくばさるに空えつるおのよみいでるは。何とてし

かくおとがのーて、おぬぐくもあーおぬぐくもあーひひああへへは。里

りおとがのーとようし。サアラケル事カイト。ヨキナリトシ。むーハ人のろは。涙ぬく。

あまつるこたは。おぬぐくもあーおぬぐくもあーひひああへへは。里

のりおぬぐくもあーおぬぐくもあー。古ノ人ハ賞フカク。詞ヲカガエ心ノ外ナルヲタダクニ

今ノ人ハ心ニ思ハヌコトヲモタクミサシ。ニ詞ヲ飾リ。支ニ不通

へは。おぬぐくもあー。ニシテ。徒ニ氣象ヲノミ論シ。身ヲ高ブリ世ヲ偽リ。巴ヲ省ズ

君はよもや。詞をいよせかざりたは。ひひああへへは。里

アそ。あまつるこたは。君ガミヤビコトヲ以テ古ヘ人ノ心ニテラハント思フ。其心ヲ

愛シテ。我ハ來レリトシ。コヌヅルハ愛スルト云フ。ナリ

何とも海でござるの里一があかはさちうなる里にこそぞ  
 媛ヒメにれきかうくげとをる里おのりしひそまは  
 ひ先ふつあてあつてくさのこころはうりかおのりしひそま  
今人男女  
 相てミエテ後ニ閨中ノ交情又ハ秘戯ノイマデモアカラサテニ語リテ笑ヒ嘲ル者多シ  
 古人ノ道ニアラス男女マヤゴトヲ以テ交ハハ藏スベキニアス閨中ハ語ルヘカラズト  
 ヌフヲヲ趣意トセルガ故ニ此詞ヲ出スニ前段ニ云フ如キ  
ハサモアレシ  
 古今ノ人實不實ノ心得ニ違ヒアルヲ引合テ味ヒ知キ  
 いてうおまのひあはげさうちうくさあぬそのひ  
ワハ黒媛山ノ  
カスミテスフ描 たしひまにぬぐさまひも君をおもひさうはひ  
下ノ段ヲ見ハシ せらじあーさちうとあまきくともうかへしひあぬあめと  
霊ト云フヲ

る里くおとたのへーとく  
黒媛山ノ靈ヲ云ハントテ楚襄王ノ事ヲ借用ウ宋玉高唐賦云昔者先王遊高唐夢見一婦人曰妾巫山神女也朝爲行云暮爲行雨  
セシカタモノナリテシ  
 せらじあーさちうとあまきくともうかへしひあぬあめと

たらしはよみお勢のまうひにぬだうぬち

くはひ先おぞゆへさしひぬ  
ぬだうのウツロキトウツク冠辞レコノ外ニモ  
 とばう里うらむてはーむうふにひまきろくろ里  
物ノ隙ク  
 夜明シトシテ  
 白リナルナリ  
 日まにあうーちうこのむはへにおりおまめのみと  
端正ノ字意ヲ  
ヤカナルナリ



友人子ほをみて

子鳳ハ京ニ住ム人シ。頼方ノコニツキテアツ、ニクタルヲ。蝶夢伴ナニ出シ。井テハ伴ナシ。此兩子吸露卷ニテ

出合ニ雅談モシト契リタルナリ

みやこそとるれ、あはれに遊びとくげ、松蔭をもとる

ひくたがひほをさくみく、序前も遊み、あはれそのゆみハ

猿たにのそくおとほし

すこまにええは、あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

そが、あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

此一段前ノ雲トナリ。雨トナリトナリ。段ヲ受テ。前ヲ照シ後ヘヲ結ブ

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

かたも遊ぼうしど

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

いもあはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

を大なるあはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

あはれにのぼも、あはれにゆたを、あはれに

意くさもくちかからみ

つぎの日も回ぐ百重喜いそは歌

齊藤氏と字  
ニテ兩石ト云フ

歌をほづりく

志強いとハ後思て人死すとくさる

あらくれおのちのまぢはあはれとくさるひのまぢあはれとくさる

志げりあひてささく

家さほ色おとろ今夏あはれと

さてあはれものされ結人もはづりく馬負さくはほはり

夢くゆく一音法作あはれとくさる

あはれとくさるものさるあはれとくさるあはれとくさる

藤溪ハ近隣安中

テフ取ノ人ナリ

あはれとくさるかたさくこのまぢりさるのまぢいさるあはれ

此狐窟ノ事ハ此近キワタリニ捷行女婦ノ事ヲ借テシタコハ俳人

常ニ開キ取ニ居テリヲヨシトオモヒテ明ラカナラシ事ヲ求メズ且人ヲ惑ハス

テハ捷行女婦ノ淫聲ヲ以テ人ヲ盪カシ狐ノ美婦ト變化シテ男ヲ譏ス等シ

誠ニ耻ベキニアラスヤト心ニ憤ヲ發シテ古ヘニ依テ今ヲ正シ片歌ノ名目ヲ世ニ

テフ取ノ人ナリ

〇三



たりぬるにやうとあはれなるに  
 木垂し枝ノ  
 タレタルナリ  
 そふとなし、寺かへ見ゆる  
 亦もあはれなるにやうとあはれなるに  
 貴の物のまはりについでて  
 せいのまよおほくおてあはれ  
キツトモ又  
キツチモアリ  
古キ物語ニ燕ノ古クダ  
ナト、右ルニナラヘリ

うらやまをいふのうらやま  
 くらひくおろしつゝ  
 すかぢを耻ル  
 名はるるをいふ  
 おどろきうつゝ  
耻カシキコト、今  
用ルル聊違  
 さいまのうらやま  
 さらくあはれ日父をたづね

西にたゞよふもなきはこゝに世にさうらひさしとおもひたらしを。  
 よこぢのぬいへにおそりけりびよあなうらを 田舎ノ くれくと 限リキ  
 ぐふとおぼえへにかこもぬおれさまをたかしてしるしより侍。  
 身をたかかるとほにあらぬこの日も藤ふりしを。皆おほよばあひ  
 しなうらなみどりなるたぐさてのどひあひぢがにけりけり。  
 古はくもゆくぬぐぬがたがしよふさうさう ウレシ 大人モ様ニ居 あて  
 やこおそふにともくくろのまぐさぐさ 給フ身ナレハ  
 うらもみぬぐるるるるるる

憐愍ノ意ニ古キ詞ニメグヤ  
 君が戀ニ死ニセントモヨメルン  
 噂かたさくらに

るるるる 空ヤウニシ 眞にまじくおほくさるるる ミデ おあひ  
 らのこからんぬもいぬぬぬ メニハロ とも〜うらぐさ  
 ようらうらうらうらう メニハロ かなしうらう メニハロ おあひに  
 とも メニハロ 舟舟 メニハロ 珠理 メニハロ ら メニハロ おあひ  
 雲のどくほろかひく メニハロ まか メニハロ へ メニハロ え メニハロ ー メニハロ ま メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ひ メニハロ び  
 うら メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ う メニハロ ち メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち  
 ち メニハロ う メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ う メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち  
 ひ メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ う メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち メニハロ の メニハロ ち メニハロ ら メニハロ ち

1104

「胡地心」

今やうはまの秋のくへに  
コレハ王照君ノ事ヲ作りナレタル今様ノ長歌ナリ

くけくおのぶがけのふぼくお月もかろあまぬ  
此長歌ノ中ニ爰ニ假寐ノ月ヲ見テナド云

詞等  
アリ  
あうもいぬのありでふははせもくがうんとつたいこも

むほをおひやまらふはゆやんこもつひかまこもやうら歌

こころに小キ童のこころおこころおこころ

さみごふにいとぬきこもまよ

おのうあぬく

くハ相キリてあうけ里くくまらふこらづの勢ぞあたま

土佐日記ニオトロキテイトヲカシノ文段ヲ借用

ろまらうけけいふへおぼへたうそまゆりる  
十言

あしたの海はみうらわはけくこもまらうらのこたの歌  
九言

せぞうらはかこころおぼへたをこめらまのまけけ勢はさじ  
旋頭歌

あまみかまかおまのこいらいしまるまのちこ勢をも

よまおこころその神さるけうらまおへはるるもやとて

くくも矢であつ  
古ノ片歌多クハ十九言ノ旋頭歌ハ五七五七七ニ句ヲツガフ其付クヲ云ヘル心然ルニ近世短哥ノ片歌ノミ有テ十九言ヲ作

ル者ナレ此棹行女婦ノ是ヲ云ヒ出セル暗ニアタレト云ヘシ大人今コノ志ヲ置玉フ  
事深シ依テオトロキ思ヒ道ノ神狐ニノリウワリテカク我ニ教ヘ玉フナラント息子  
心魂ニ徹シ敬マヒ思ヘルトシノキツニカリテトハ

俗ニノリウツルト云フナリ古キ言ニ出タリ  
さてみやぬのまもはう

丁多たうく 嘔声し俗ニ どりーびるさく ねねほく お不し ねがま

さほにんひらりもあ〜く ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく  
里ぬほぞいとふるね

さほのくふりてハ ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく  
さほびの人あつまほさき ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

さほかこがはあひひらりさほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく  
さほたほよく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

ひく日らにさほにあつまほけ日かこさほく

あね日ねほろ ニヒルコ ねねほく 「寝し

ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

あこ巴ねがひにねねほく

次にねねほくたかおのねねほく

かの イニヤ ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく ねねほく

あゆむらうらりと、其物九にゆくあまひこがのあつらふ  
 見にゆく川系はいと涼しくもあつらふをさしとまほひうら  
 の山はまよひ。伊香保山萬葉二  
 オホリヨメルナリ 夕日もはやうらむらなぞくおたふ

はくありはほほくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
「直土」  
 「直土」 ひこたれそくめまひこくくくくくくくくくくくくくくくくくく

の種はひびきあひくはまきぬあまクルナラン  
 トニフコ 万葉長歌ノ  
 おとせあつらふ俗事ヲ用井タルノニ子ハ古キ詞シ人曆  
 歌集ニウスキマニ子ヲイメツニナドツケケリ 万葉長歌ノ  
 夕日もはやうらむらなぞくおたふ

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
「箱縁不定」 あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくく  
「大河」 あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
「小歌」 あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
「一向二孤ノ本性  
 見アラハサント あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
テ来タリレモ今ハ  
 カアテオスレチレシ あまもきよそふくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 るくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

かたはあはもひはほくほち

みちとあやふあ

おもしろいものぞの孤もかくまでなせそ

「スルソ」

かに思ふてあはれぬくげおはさをあひたてほする世に

「片哥」

俳人のうつりおなく事をかまへばをたくみくあぬ人をほと

タハレト

いふおもしろいものぞの孤もかくまでなせそ

「巴ムカフヲ指ス」

「孤モサレト」

のぞみくげおはかくせうのうけおはえんをいもちたせ

「旋頭歌」

うさうあはれほくはあひおひたがせしたくもさうは

「雅言」

「非情」

変化ノ類、  
うがぬのにもせおはやまのうはえかあひひのい

「高末」

あにおさうくおはせおはくもたぐはるもあかちひ

ひぬおをほげのうはるもあかちひあまふもあかちひ

あや一はにぬはひひく海にもおちいりぬ一うにやと

りぞ  
如此正道ヲ以テ人ニ戒サントス者ヲ容易ニ思ヒテナド歎クヲ  
以テオカシト云意アリ。コレハ次ニ明暗ノ論ヲ出サガタシ

あや一はにぬはひひく海にもおちいりぬ一うにやと

「狐ノ舞ヲ  
作り出シ」

よりて見ゆかの方欲もみくをいへるあや一はにぬ

はつらぬおもしろいものぞの孤もかくまでなせそ

正にふさび事くろみぞあつくぬまび君を見あたまは  
 けうし事のひくもふまご世の人あー此行をおのて  
コレハ排諸 附合ナリ  
 深くもさひまひなぬはまよひくたさひいまひい  
 を失へばうびく君さば片あまみく身さのひくのをひらね  
 中火のひらまをばうぶくうんくたさひおちいんくま  
 ずくおとくくはひまもてまきいんくもてくあうださあんた  
闇キ排諸ノ道ニ陥リテニ面白シト思ヒタル人ヲバ 何トシテアキラカナル道ニ出ス其方便ナキヤト嘆キテ向フ  
 ぶらりあまかすを免にまのふ  
オノ答ニ我行哥ヨミタルハ設ケテ ヨミタルニモアラズ不意ニ出タルナリ

身さくせぬ人ますくろみぞあつくぬまび君を見あたまは  
 てくをあつく  
我今道トスルハ暗キ取ニ人ヲヒキイルヲ宗トスルニエニ小ニ  
ニテモ明ラカナル取ニ出ス方便ハシラヌトシテ極行ヲ婦ト  
狐ト俳人ト道ノ 相似タルヲ云フ  
 まごおひく君がげさひまらぬ人かんくくさ  
君カ此道ト指タルハ今行哥トシテ正セハ取ノ  
道ニ暗キ道トハ是ヲ正シ改メハ排諸ヲ云フ  
 正にふさび事くろみぞあつくぬまび君を見あたまは  
オホキ  
 あまひくくろみぞあつくぬまび君を見あたまは  
又暗キ排諸ニ入テアラフ者ハオホキ  
事ヲ正シ明ニカナル道ヲチ者ハ少ナキ  
 正にふさび事くろみぞあつくぬまび君を見あたまは

又いづいさるひゆんといひにのくいるむべともおほぬを  
大人モトタビハ其暗キ俳諧ノ道ニ迷ヒ人ハ然レ其道非ナルヲ知テモ心ニ  
間ヒ求メ今明ラカナル道ニ出テ其迷ヘル人ヲ共ニ道ニカントシ至フユ心アルベキ人コノ  
教ヘニ背クベシ  
よオモホエトシ

サブルコ  
コハ推行女婦  
今世ノタノ道ニ

とれせはふあをのうらむハ世にあんなたつをを  
事ヨセテ暗キ取ヲ以テ人ヲ教ユル師範ヲサス然ルハ人ヲ惑ハシテ業トスル道ヲ  
今ガレ出テハ外ニ明ラカニ道ニ在テ世ニテガラハアルベキ術ヲ知ラスト下段ヲ見令  
唯人のものさくををびりるもあまき路にいづたてむとハ  
アルハ俳諧ヲ以テ人ヲアヤルヲ知ラスコレヲ好ム人又ハ門人  
等ヲ集メ謾リ九言ヲ吐テ業トス故ニ人モ明キ道ニ非ラス  
みしこハこの路やゆりたもおほのれとあまきも人あまらばあ

おひむ一日もせをさるはづいづにまののら  
善悪ノ取ヲワキテ又人モアラジ故ニ其己ガ身ヲ  
省心ハツカシキヲモアレ強テ教ヘガレバ人慕ハズ  
俳諧も多きをたぐる事をおにたし路にいとくきふ  
さしにみかひハ又二世のまののら  
ノ賢者ヲ  
待テトシ  
とつた  
とや<sup>初夜</sup>やもころん

然レドモ  
スコレハ  
君とやく家を  
大人ノ願ヒハカハル天儀ナレハ  
一世ニ果キ物ニアラニ後世

みまのころいこころはまをころいこころに人くせせうをた行あめて



あつたやゆ

みちゆきさぐり

子をねもふし急なるをりり

夏の「雉心」の「さざ」

○ニヤハル  
古事記八千矛神サヌツリ  
キツミハドヨムナドアリ  
西洋人あつたやゆ

まろ白木子母杉路るさつたやゆ

あつたやゆ

なつたやゆ「困スル心」

吸露菴藏板

春肆

江戸通本町三丁目

須原屋市兵衛

